

① 標題

バングラデシュ南部避難民救援事業

② 部署・氏名

ICU 金子千恵

③ 文書

私は2018年11月24日から1月11日まで、バングラデシュ南部、コックスバザール県にある避難民キャンプで、日本赤十字社（以後日赤とする）基礎保健 ERU(Emergency Response Unit)第3班要員の一人として活動に参加させていただきました。

2018年8月末以降バングラデシュにはミャンマー・ラカイン州からの避難民が急速に流入し、保健医療や人道支援が急務となり、日赤は9月から医療チームを継続的に派遣し、支援に入りました。日赤はキャンプの中に診療所を構え、そこでバングラデシュ赤新月社のスタッフと共に診療活動を行いました。キャンプにはビニールと竹で作られた簡素なテントが密集し、長時間並んで得る救援物資でなんとか日々の生活を送っている避難民の方々は、様々な健康の脅威にさらされていました。舞い上がる粉塵や朝晩の低気温の影響をダイレクトに受けるため風邪や肺炎を、汚染された井戸水により下痢や嘔吐を、不十分な栄養で重度の栄養失調や貧血を、生活を立て直すための労働や履物を買えず裸足で歩き回るために怪我を。多くの方が日赤の診療所を訪れ、私たちは診療に当たりました。中には、日赤診療所の評判を聞き、30分以上歩いてきて下さった患者さんもいらっしゃいました。滞在中にはジフテリアのアウトブレイクも起こり、治療と感染の拡大を防ぐために奔走しました。中には救いきれなかった命もありました。環境や栄養、衛生面が整っていれば防げることもあるのに、日本なら救えた命だったかもしれないのに、と悔しく思うこともありました。けれど、チームの力を集結し毎日力を尽くすことで、多くの人々の健康を守り、予防の為の知識を与え、触れ合いにより避難民の方に笑顔がみられ、彼らの抱える様々な健康不安を軽くすることもできたと思います。

避難民の数は私たちの滞在中も増え続け、現在も厳しい環境の中での避難民の方々の生活は続いています。

④ 写真等

